世界樹物語

カンザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界樹物語

【Ｎコード】
Ｎ２５９２Ｌ

【作者名】
カンザス

【あらすじ】
破壊神を破壊した男がしんだ
神に転生していいと言われ、行った場所は？

死んじゃった

今、俺の前には変な男が土下座している。どうやら俺は死んだらしい。そして目の前にいるのは、神？　信じちゃいないが居たんだな。

「あのー！！　ほんとすいまっせんした！！　僕がプレミア付等身大ベジータのフィギュア落としたせいで死んじゃって、まぁクリリンのフィギュアなら生き残れたんっすけどね。プレミアじゃしょうがない」

こいつの言ってることはよう分からん。誰か通訳を用意してくれ。んっ待てよ、こいつ僕のせいとか言ったか？　俺こいつのせいで死んだのか？

二秒後には、土下座の体制のまま顔面をめり込ませていた。

「俺はお前のせいで死んだのか？　答えろ」

「はい、そうですぅ～」

弱々しく返事をしてきた。こんなことがありなのか。確かに、俺は英雄とかあがめられて、調子に乗ったかもしれない。けどいいじゃん、破壊神とか言う奴倒したからいいじゃん。

「あの～、やってしまったことは仕方ないので転生のチャンスだけあげますから。、もう許してください」

「転生？　生き返れるってことか？」

「まぁ、簡単に言えばそうですね」

「いますぐやれ」

いきかえれるぞやったね。

「じゃあ行ってらっしゃい」

足下に魔法陣ができた。目の前が真っ白になった。

どこ、ここ？

目の前には見たこともない光景が広がっていた。
ま、ぶっちゃけると人が空飛んでいます。
「やっほー」
気の抜けた声がする。振り返ると背中に羽の生えた金髪の女が居た。
「誰だよ」
「神様の使いですね」
「なぁ、俺は生き返れるんじゃなかったのか？」
すると笑顔で
「生き返ったじゃないですか」
「じゃあここはどこなんだよ、えぇ。しかも俺ちっちゃくなってるぞ」
「まぁ、この世界ではその年ぐらいがちょうどいいんですよ」
「はぁ～　であんたは何しに来たんだ？」
「神様がここに飛ばしたのに魔法の才能やるの忘れてたとかで私がここに。ま、めんどいんでちゃっちゃと済ませますね。はいおわりました～。しばらくここにいるんでよろしくお願いしますね」
こちらにほほえみかけてきた。
「俺どうすりゃいいの～～～～～～」
その声はむなしく響いた。

この世界

「ところでおまえは誰なんだ？」

「私の名前はミリア　ミリア・フランベルジュ」

「天使にも名前があるんだな」

「ムッ、天使に名前があっちゃいけないんですか」

「別にいけないとは言ってないだろ」

「じゃああなたの名前は何なんですか」

「俺の名前はアレクだ」

「それだけ？」

「それだけだよ」

「まぁいいです。まずは街に案内するから」

「あぁ」

そういってミリアと歩き出す。歩いてすぐに見た光景は落ちている剣や杖。

「なぁここで何かあったのか？」

「それは知らないけど、たぶん戦争だね」

「戦争か、違うところに来てもやることは同じなんだな」

「アレクの世界にも戦争があったの？」

「ああ、とてつもなく長い戦争だった。最大の禁忌と言われた生物の創造をした奴のせいで破壊神が生
まれた。それを倒すために多くの人が挑んだそして殺されていった。俺も挑んだ仲間と一緒にそして俺以外死んだ。最後に奴を殺した」

「そう・・・」

ミリアは少しうつむく

「で、この世界のことについて教えてくれ」

「うん、歩きながらだけどいいよね。この世界には四つの大国があるの。一つずつ説明していくと、
人間の治める国ギルガメッシュ。この国はとても治安がよくていろいろな国との交流が盛んね。
次は竜の治める国ドラゴンバレー。この国は他の国との交流が全くなく情報がない国ね。竜って言うのは高い知性と大きな体そして、翼を持つのが竜。竜には種類によっていろいろな特徴があるからね。
次は有翼族の治める国トロパイオンね。有翼族はその名の通り羽を持つ者のことこの国も情報なし。
そして混合国名前も決まってない国ね。この国は全ての国の者たちが集まっていると言われてる。まぁこれくらいね」

「ふぅ～ん、この世界にはそんなに国があるのか」

「そうね、さあ着いたここがギルガメッシュ」

「へぇ、ここが」

大きな城門と大きな城壁これならば人間との戦争ならば城が落ちることはまずないだろう。相手が人間ならば・・・

「おまえたちは何者だ」

衛兵らしき者が話しかけてくる

「私たちは旅の者で、ここに住もうと思いここに来ました」

衛兵は何か考えるような仕草をしてすぐに顔を上げた

「よし、通っていいぞ」

「ありがとうございます」

門が開き中に入る。

門の中入るとそこにはとても活気のあふれる通りがあった。とても大きな通りなので通りの左右には出店が立ち並んでいる

「へぇここがギルガメッシュ」

「うん、ここがギルガメッシュの城下町」

「でも住む家なんてどうするんだ？　俺は金なんてないぞ」

「それは大丈夫。今から魔法学校で住み込みで授業を受けるから」

「魔法学校？」

「正確に言うと魔道師養成学校。今ここから見えるでしょ。あの石でできた建物」

「あの杖の看板の？」

「そう、今からそこに行くの」

「じゃあ早く行こうぜ」

「えっ、ちょっと」

「だって俺早く魔法が使いたいからさ」

「本当子供みたいね」

「見た目は子供だぜ」

端から見ると黒髪の少年が金髪のお姉ちゃんを引っ張っているようにしか見えない。

「着いた～」

目の前から見るととても大きな建物で目の前からでは建物全てを見ることはできない。

「おや、何のようかな？」

白髪の老人が声をかけてくる。
「今からここに入学しようと思って」
「そうか、では入りなさい」
中はシンプルな構造だった
「なぁじいさんあんた誰だ？」
「ふぉっふぉわしはこの学校の校長じゃよ」
「へぇ～」
話していると部屋につく
「さぁここに座って入学しますと言うだけでいい」
「「入学します」」
「さぁこれから君たちはここの生徒一年間がんばってくれたまえ」
「おう」
「はい」

気の合う仲間

「ふぁ～あ。何でこんな早く起きなきゃいけね～んだ。俺は眠い」

「あんたが悪いんでしょ。置いてくわよ」

「あっ、ちょっとまってくれよ」

昨日校長に授業は明日からだと言われ、部屋で睡眠をしていたわけだがどうもこの世界について気になってミリアに話を聞きに入ったが追い出された。ので本を読んでいたが実に興味深く読みふけっていたら起床時間一時間前そして今に至る。

今向かっているのは教室。この学校には全部で５２個の教室があるが、そのうちの４８個は使われていないただの部屋だ。

「まったく何でこんなに広いんだよ」

ズット続く廊下と階段にイライラしていたアレクは悪態をついた

「仕方ないでしょ。この学校は元は多くの生徒を指導するはずだったんだから」

「じゃあ、何でこんなに少ないんだよ」

「それは「戦争に使われるからさ。魔道師はまぁ君みたいな子は使われないだろうがね」

突然声がしたのでそちらを向く

「おっと名前を言うのを「おまえには何も聞いてねぇ～んだよ」
なぜアレクがこんなことを言うのかというと目の前にはかっこい
い部類に入る男しかも眼鏡をかけて
いる。この二つは良いとして台詞がイライラした。これでも俺は実
年齢１６まだ子供だけど、ここまで馬鹿にされたくはない。まぁ見
た目が悪いのかな

「そうか、だが僕も君には話していない。そちらのお嬢さんに話し
ているんだ」

「へっ、わたし？」

「僕の名前はシュード・ハンデルセン。これでも貴族の息子だ」

「だから？」

「何！！」

「おまえが貴族だとか関係あるのか？　俺にはそんなことを聞いて
意味はないし、お前がこの学校にい
ることもおかしい。戦争に使われるようなところになぜ貴族の子が
居るんだ？　それは間違いなくお前が落ちこぼれか何かの理由で邪
魔だからだ。違うかい？　シュードさん」

シュードの様子が変わった最初までは俺の言うことを聞き流して
いたが今は怒りが顔にでている

「ガキに何がわかる！！」

そういうとシュードは教室の方に走っていった

「あんた言い過ぎじゃないの」

「そんなことはないと思うぜ。本当の貴族は自分の物腰全てに自信を持っている。あんな奴が貴族とは思えない。それに・・・」

アレクの視線はミリアにいく

「それに？」

「いや、なんでもない」

歩きながらも話をしていたので教室は目の前だ。ちょうど新しく入る者ばかりだったのでこの教室を使って基礎から全て学び一年後卒業するらしい。

教室の戸を開けると生徒たちは騒いでいた。一目見てわかるのは生徒の数教室の半分の席は空いている状態だ。そして男子と女子が別れている事だけ

「なぁ、おまえも新しく入ったのか？」

話しかけてきた方には同じぐらいの年の少年がいた。その少年はオレンジ色の髪の毛を後ろで縛りい
かにもヤンチャをする子供にしか見えない

「ああ」

「お前何でここに入ったんだ？　今から戦争が始まるからここの生徒は連れてかれるかもしれないってのに」

「さぁ、目的はたいしてない。それよりそんなことを聞いてくるお前は？」

「俺か、俺は傭兵になって金を稼ぐためだよ」

「へぇ～」

そんな話をしていると、教室の戸が開き教師っぽい人が入ってきた。

「いますぐに体力をはかってもらう」

「何でだよ」「魔法は？」などと野次が飛ばされるが教師は続ける

「魔法を覚えたときに効果を確かめるためだ。早く外にでろ」

「ふぅ～、何するんだ？」

「さぁな？」

「それよりお前に名前言うの忘れてたぜ。俺はクロウ」

「そうか。俺はアレクだ」

話していると外に着いた。

「さぁ、計るぞ。５０メルタ（メートル）走だ」

生徒がどんどん計っていく中やっとクロウの番が来た

笛が鳴る。それがスタートの合図。クロウは大体七秒で着いた

「馬鹿な！！　何であんなガキが」

「クロウ結構早いな」

「まぁな。おやじに鍛えられてたし」

「次俺の番か」

「ああ頑張れよ」

「おう」

笛が鳴り、久しぶりに全力で走る気がした。風が後ろにながれていく感覚をよく感じた

「タイムは六秒」

「落ちたな、大分」

「おいアレクっお前速いな」

「まぁそうかな」

気の合う仲間も出来やっと学園生活がスタートした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2592l/

世界樹物語

2010年11月12日07時19分発行